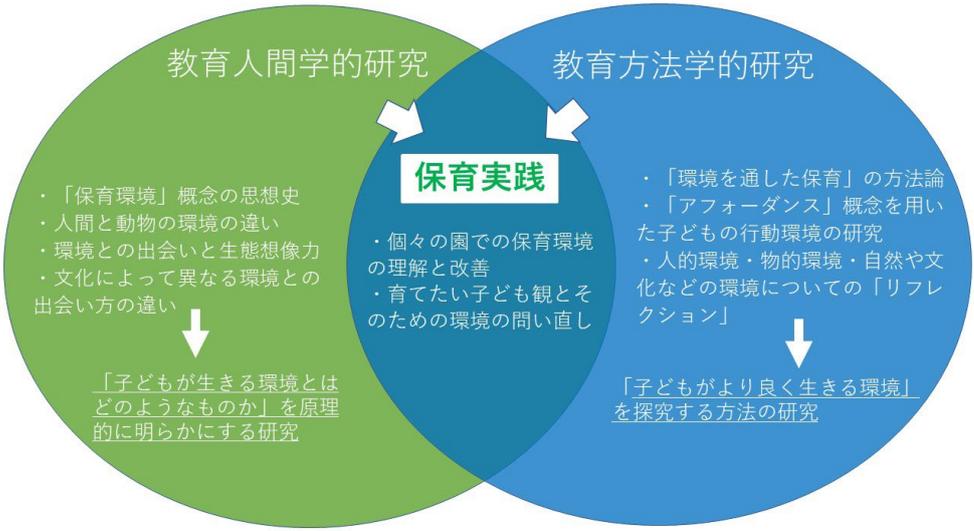


<p>教育学・心理学</p>	<p>【代表的な研究テーマ】</p> <p>□ 子どもたちの多様な「出会い」を生む保育環境の研究</p> <p>□ 子どもたちが経験を「深める」保育環境の研究</p>
<p>key word</p>	<p>課題解決に役立つシーズの説明</p>
<ul style="list-style-type: none"> ■ 保育 ■ 幼児教育 ■ 保育環境 ■ 自然体験 ■ 感性 ■ 生態想像力 	<p>保育・幼児教育の現場では、それぞれの園の保育観や子ども観を反映した多様な実践が行われています。そしてそのような実践は、どのような保育環境のなかで行われるのかによって、その質が変わってきます。園が変わればその園にふさわしい保育環境も異なります。それぞれの園の子ども観とその環境を問い直すことで、保育実践の向上にとって必要な環境が見えてくるのではないかと思います。</p> <p>私自身は、子どもたちの環境との出会いと、その経験の深まりに関心があり、以下の二つのアプローチで研究を行っています。</p>
	<p>研究のアプローチ① 教育人間学的研究</p> <p>そもそも子どもたちがどのように環境を体験し、どのような環境を生活しているのかを原理的に研究することを試んでいます。そもそも環境とは、それに対応する主体がなければ、存在しない概念です。そして、人間と動物ではその「環境」は異なりますし、文化が違えば人々が生きる「環境」もまた変わってきます。</p> <p>「環境」とは子どもにとってどのような意味や価値のあるものなのか。このような問いに対して、教育人間学の観点からアプローチしています。特に、子どもが「生きているもの」と出会ったときに広がる想像について、「生態想像力」という観点から研究しています。</p>
<p>山本 一成 Issei Yamamoto</p>	<p>研究のアプローチ② 教育方法学的研究</p> <p>子どもはときに大人とは異なる、多様な仕方でも環境と出会います。子どもと環境との関係を理解する上で、「アフォーダンス」という概念が参考になります。「アフォーダンス」とは「環境がもつ行為の可能性」を指す概念であり、この概念を使って保育を記述し、見直してみることで、これまでとは違った環境の見え方を得ることができます。</p> <p>そのほかにも、「リアリスティック・アプローチ」や「エピソード記述」などの方法も用いながら、ヒト・モノ・自然・文化などについてリフレクションをすることで、子どもがより良く生きることができる環境を探究する研究を行っています。</p>
<p>教育学部 准教授</p>	
<p>【プロフィール】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●専門分野 ・幼児教育学 ●略歴 ・2006年 筑波大学第二学群人間学類卒業 ・2008年 九州大学大学院人間環境学府都市共生デザイン専攻修了【修士(人間環境学)】 ・2017年 京都大学大学院教育学研究科臨床教育学専攻修了【博士(教育学)】 ・2008～2011年 京都造形芸術大学子ども芸術大学 芸術教育士 ・2014～2018年 大阪樟蔭女子大学児童学部講師 ・2018年～2020年 滋賀大学教育学部講師 ・2020年～ 滋賀大学教育学部准教授 <p>【主な社会的活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本保育学会、日本乳幼児教育学会等 ・保育研修・講演 日本保育協会滋賀県支部、G3 保育環境研究会、大津市公開保育研究会等 <p>【主な著書・論文】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『保育実践へのエコロジカル・アプローチ—アフォーダンス理論で世界と出会う—』九州大学出版会(単著) ・『保育原理』七猫社(編著) 	
	<p>企業・自治体へのメッセージ</p> <p>子どもが育つ環境をつくることには、マニュアル化できない難しさが伴います。環境について臨床的に「問いながらつくる」ための研究を行っていきたくと考えています。</p>